

『これからの附属学校のあり方を考える会』に参加して

11月24日（金）東京、お茶の水女子大学。東京駅から丸の内線で茗荷谷駅下車。徒歩10分で目的地に到着です。歩き始めると、今年顔見知りになった各地の副校長先生方と挨拶を交わし余裕をもって会場に到着できました。今回参加した会議は『これからの附属学校のあり方を考える協議会』。文科省からの行政説明に続いて特色ある附属学校の実践紹介、そして福井大の松本先生からのご講演。帰りの新幹線で思っていたのは、やはりこれからの本校の進む方向でした。研修校として生きるのか、研究校として生きるのか、宮城県や仙台市との関係は……。大分の実践例を聞いていると、本当に驚かされます。それが私たちの目指す方向かどうかは別として、改革をする上で大切なのは

- ・それが子どもたちにとってよいことか
- ・それをやり遂げる決意と覚悟はあるか

の2点です。そういう意味では、大学と私たち附属の人間がどこかで立ち止まって、さらに腹を割って話し合う必要があるようです。柳澤室長が「さすまた」の実演を通して何を伝えたかったか。あれば（やれば）よいのではない。それが機能しているかどうかだ、そのように私は受け止めました。

明るく25日（土）は特別支援学校の創立50周年記念式典へ参加。特別支援学校は附属小・中の特殊学級から分離して創設されたこと、青葉山へ移転した経緯、現在の子どもの様子、同じ附属校園にいても知らないことがたくさんあることに改めて驚かされました。それにしても中等部のすずめ踊りと高等部のエイサーのアトラクションの素晴らしかったこと、最後に全員がステージの上で歌った校歌にも感激しました。（11月27日の河北新報朝刊でも紹介されていました）。

- ・特別支援教育には教育の原点がある

初任の頃先輩から教えていただいた言葉が蘇ります。

水谷校長先生が「特別支援教育は特別なことをするのではなく、一人一人の可能性を引き出すことに気付かされた」とお話されていたことにとっても納得させられました。記念品にいただいた手作りのコースターとバッグは何よりの宝物になりました。

2日間学校を離れて、改めて考えさせられることがたくさんありました。出張の目的はこんなところにもあるように思います。同時期、堀之内先生と孝徳先生が中国に、拓郎先生と千真先生が島根に出張に出かけていました。国外や県外にこれだけの先生方が行かせていただけるのは附属だからこそです。

22日（水）には23名の先生方が参加して合唱の会の会場の下見を30分限定で行いました。今年から会場になったイズミティのステージに立った時、ほとんどの先生は同じ思いになったはずです。

（このステージで子どもたちを歌わせたい）

いつもより合唱の会までの期間が長くなりました。以前はこの時期『聴き合う会』があって、音楽部の先生方や7学年部の先生から直接指導をいただく機会がありましたが、このような機会も今はなくなっているのだそうです。なくすこと、止めることはいつでもできます。でも、その前に「本当にそれでよいのか」とだれかが勇気をもって声をあげられる職員集団であって欲しいと願っています。

（文責：副校長 手代木）